学校だより よつわ

教育目標「進んで学び　生き生きと活動する子ども」

柏崎市立田尻小学校　No.２（R6.5.30）

田尻小ホームページ：https://www.kenet.ed.jp/tajiri/tayori/

先を見据えた　環境・組織づくり

校長　○○　○○

放課後、校長室からグラウンドを見ると、親子で野球の練習をしている様子をよく見ます。お父さんはもちろん、お母さんもわが子と一緒になって野球をしている様子が見え、素晴らしい親子関係だと思っています。田尻ファイターズも声を出してきびきびと練習している様子は、昔から積み上げてきてくださった野球を通して培った伝統であろうと思います。ミニバス、バレーボール、バドミントン等へ子供会育成会様が力を入れて子供たちを応援してくれていることに感謝しております。

さて、先日、教育雑誌を見ていると、元プロ野球選手の工藤公康さんの話が載っていました。選手としてもサウスポーのピッチャーとして長く活躍した選手です。選手時代の話ではなく、福岡ソフトバンクホークスの監督をしていた時の内容に心を揺さぶられました。工藤さんは、幼い頃に両親が離婚、その後、父親は再婚をしたそうです。厳しい父親で草野球のキャッチャーをしていたこともあり、父親の練習に付き合わされたことがきっかけで野球を始めたと書いてありました。父親の構えたところにボールが来ないと捕ってくれないキャッチボールは楽しいものではなかったそうです。「どうせやらなきゃいけないものであれば、人よりも早く上達して、自分の遊ぶ時間をつくろう」と考えたそうです。どうすれば早く野球が上達するかをいつも必死で考えていたそうです。「考える」という習慣が工藤さんにはそこで培われたと書いてありました。選手、監督になっても、「考える」という思考が止まることがなかったそうです。次世代を見据えて、チームを強くするために監督として行ったことは、ユーティリティープレーヤー（万能選手）を育成することだったとあります。複数のポジションを守ることができる選手を育成することは、長いシーズンの中で試合に出場する機会を得られ、チームに貢献できることにつながり、結果的に個人もチームも成績が上がると考えたそうです。周東選手、栗原選手等、この代表的な選手です。今までにはなかった発想です。大谷翔平選手の二刀流も次世代を見据えた発想となりました。工藤監督は、循環型の組織を意識したそうです。1軍と2軍のコミュニケーションが足りず、必要な選手が1軍に上がってこないことから、優勝した年であっても、1軍のコーチを3軍の監督にしたこともあったと書いてあります。選手を育てる環境をどうつくるかが大切であると力強く訴えていました。

学校の組織も同様です。先を見据え、課題を整理していきます。年度当初、登下校のスクールバスの課題が見えてきました。児童がのびのびと自分の個性や特性を発揮できる環境づくりを考え、一歩でも前進できるようにしっかりと校内で話し合っていきます。また、田尻地区の教育力を活用し、学校の組織、教育環境によい変化をいただければ幸いです。引き続き、よろしくお願いします。